

「Dialogue in the Dark」

拝復

二週間のご無沙汰でした。こここのところの天気はまるでジェットコースターです。4月を思わせる20度を超えるような日があったかと思うと、体を芯から冷やすような雨の日もある。こうし



た気候を何回か繰り返すうちに春になるのでしょうか。その証拠に花粉は飛びまくっております(T_T)。さて、今回のお題は「Dialogue in the Dark」。すでに体験済みの方読む必要がありません。ある貴重な体験です。経験がすることがすべてです。

さて、「Dialogue in the Dark」ですが、日本では東京でしか体験することができません。千駄ヶ谷の駅を降りて徒歩で10分ほどのところにあります（過去には期間限定で主要都市で行われたようです）。狭い通路のような道を通って地下の会場にたどり着きます。

「暗闇の中での対話」ドイツから始まったエンターテインメント。参加者は暗闇の中に入ること、普段知ることができない、視覚情報が完全に遮断された世界を体験することができる。会場に引かれた一枚の厚いカーテンを潜ると、そこには漆黒の闇の世界が広がっている。

まだ、わかりにくいですね。この地下の会場は一切の光が遮断されています。それも完全な闇です。普段暮らしていると暗いところのようでも幾分かの光があります。ためしに自宅で電気を消してみたのですが、様々な機器のパイロットランプがほのかについています。しかしこの会場は

完全な暗闇。目を開けていても閉じても同じです。同時に体験できるのは8名以内。アテンダントと呼ばれる視覚障害者の誘導で様々な体験をします。この施設の中では視覚障害者の方にとっては普段の生活、われわれは視覚が奪われて一寸先も見えません。もうお気づきでしょう。**視覚障害者の方と私は普段の立場が逆転しているのです。**

カーテンの前で渡されるのは普段町を歩いていても見かける白い杖。視覚が完全に奪われるので頼りになるのは、嗅覚、味覚、聴覚、そして触覚です。会場がどのくらいの広さなのかも全くわかりません。杖で前を探りながら少しずつ前進します。あちこちに様々な仕掛けがあって、アテンダントさんが「さあ、ここからは橋を渡ります！」杖の先に「あ、木の感触。」次の瞬間びっくりしました。橋はつり橋だったのです。当然揺れます。視覚を奪われている私に事前にその情報はありません。よろけました。「橋」があるとわかっているも「**どんな橋**」かという情報がないだけで無様な行動になってしまう。

当日は 5 名だったのですが、もちろんお互いは全く見えません。コミュニケーションはほぼすべて「聴覚」すなわち声です。「りゅーぼん、ここにいます」「SHU ここにいます」・・・**声があるだけで安心するのです**。そして近くまで言って手を伸ばしてお互いの存在を確認します。



声とタッチする手のなんと優しく安らかなものか (ちなみに男同士です・笑)。

アテンダントに導かれて (声だけです)、暗闇を進みます。広場のようなところに出ます。アテンダントさん「自由行動!」。え? 思いっきり**不自由行動**なのですが。杖を頼りに歩きます。「あ、何かがある」「木だ」「揺れる」「あ、ブランコだ!」この発見が素晴らしくうれしい。子



供のように「ここにブランコがあるよ!」周りのメンバーも寄ってきます (正確に言うと寄ってくる気配がします)。ところが落とし穴。ブランコに揺られたのですが周りの視



覚がない状態で乗るとあっという間に酔います。うっ、ちょっと気持ち悪い。

アテンダントさん「ちょっとしたゲームをやりましょう」。「**ここにいる 5 人のメンバーの誕生日の順番に並んでみましょう (年齢ではありません、月日)**。ただし、しゃべってはいけません」
「え?」さらに声を使えなくなりました。ま、これはある方法をみんなで見つけ出し、見事に並ぶことができました。方法は内緒です。というかネタばらしをしたら皆さんが行くときにつまらないですよ^^。お互いに助け合う心がなければ決して達成できません。

この頃には、新しい環境に少し慣れてきます。多少あった不安もどこへやら。子供になったような気分です。ふと気づいたのですが、**視覚を奪われることによって他の臭覚・味覚・聴覚・触覚が研ぎ澄まされて来る感じがしました**。木の香がする。水の音がする、地面に砂利がある、座ってみる、木の破片に触る、臭いをかいで見る。全く新しい体験です。

アテンダントさん「少し休みましょう。皆さん好きなものを注文してください」。そう、この施



設の中には喫茶店があるのです。思わず頼んでしまいました。「ビール!」ところがお札しかないんですが何円札かわからない。スタッフの方が(この方も全盲者です)。「大丈夫ですよ、これ 1000 円札ですから、お釣りは 600 円です」。指先で触る、明らかに大きい 500 円玉、と 100 円玉であるはずの小さい硬貨。外に出てみたらちゃんとその通りでした。

ビールが出され、一口、「うまい!」のど越し、香りが良くわかる。多分サッポロの黒ラベル。

しかし目が見えないはずのスタッフがなぜビールをこのように美味しく注げるのか。不思議です。一息つくと 90 分のツアーはあっという間に終了。これは目からうろこの体験でした。

90 分間視覚を全く失った私に何が起きていたのか。普段の生活では五感のうち視覚が 40% くらいを占めているそうです。つまり、部屋に入った瞬間は 40% の感覚が失われていたわけです。脳科学者の茂木健一郎氏によれば、「**視覚情報を失ったことによって他の感覚が動き始める、脳の全体性の回復**」と言うものが行われる。ある意味では**視覚情報からの解放を意味するのではないのでしょうか**。私たちは普段人に接するときにはやはり、視覚から様々な判断を
してしまっています。

ここから先はアテンダントさんと茂木さんの対話から気になる部分をいくつか

- ・ 普段の生活であまり不便はしていません。可哀想でもなければ不便でもありません
- ・ 普段の生活で一番使うのは「聴覚」。杖の音の反射を聞いてどこに何があるかわかる
- ・ 会社が千駄ヶ谷ですが帰りに神宮球場のほうを向くと対戦カードがわかる（応援に特徴）
- ・ 普段一緒に付き合っている人だと。息遣いや振る舞いで健康状態や精神状態がわかる
- ・ 障害者を特別扱って欲しくない（同情されるのが一番いや）

日本という社会は障害者を外に出したがる社会のように思います。中には本当に自宅から一切出さないと言うような例もある。欧米では障害者が普通に政治家をしていたり、大学教授だったりする。専門用語で「**サヴァン**」と言うらしいのですが視覚障害者が特別な才能を発達させることがあるらしい。米国の数学者は「三次元の球をひっくり返す」^^;、ことを数式で証明した。

レイ・チャールズ、スティービー・ワンダー、ダイアン・シューア枚挙に暇がない。

参考図書：「真っ暗な中での対話」茂木健一郎 講談社文庫 552 円（税別）

今回の体験によって私が一番感じたのは「人間はずいぶん見ただ目で判断をし行動をする。しかし一端視覚情報を遮断して他の感覚を働かせることでリラックスできる」と言うことでした。うまく説明ができていませんね^^;。詳細は体験をお勧めします。連絡先はこちらです。→

<http://www.dialoginthedark.com/>

ぜひ、体験をお勧めします。目からうろこが落ちること請け合いです。さていよいよ国分寺に引っ越します。新しい事務所は 3 月 15 日から。3 月中旬号はお休みします。次回にお目にかかるのは 4 月。桜がきれいな季節です。ではでは～（^^）/～～～

株式会社アール・リサーチ 代表 柳本信一

Tel 047-342-3181 mobile 090-7428-8999 mail : ryubon@kkd.biglobe.ne.jp

ブログ、ほぼ（笑）毎日更新しています→<http://rresearch.blog103.fc2.com>